

研究ノート

沖縄における精神科医療の黎明

當山富士子¹ 高原美鈴¹

〈研究目的〉沖縄における精神科医療のスタートは、何時、誰によって、どのようなかたちで行われたのか明らかにする。

〈方法〉1) 米国軍軍司令室第二次世界大戦作戦に関する史料、①沖縄戦をテーマにした図書及び証言記録、②沖縄戦を記録した県史・市町村史、字誌、③その他戦争に関する新聞等。

〈まとめ〉1) 沖縄戦の末期、硫黄島帰りの精神科医である清水純一は、沖縄本島中部のアメリカ軍政府G-6-54病院が開設され精神科医療が行なわれたという記述になっている。現在において、それが沖縄における精神科医療のスタートという一般的な理解となっているが、その場所や期日について、幾つかの疑問が確認された。2) 沖縄における精神科医療のスタートは、米軍の沖縄本島上陸後の4月4日には、31野戦病院が前戦へと移動していた。また、民間人に対する精神科医療は、少なくとも1945年5月中旬から米軍の野戦病院において米軍により実施されたと考えられる。

キーワード：沖縄 精神科医療 沖縄戦 米国海軍病院

I はじめに

精神科医の立津(1979)は、「戦前、沖縄県には精神科専門の医師も病床も皆無であった。」¹⁾と述べ、上与那原(1969)も戦前の沖縄の状況に、「明治33年制定の精神病者監護法は沖縄にも当然適用され、その数は県庁を通じて内務省に報告せられていた。昭和16年には非監置者775名と、監置者115名、計890名の届出数が報告されている。これ以外にも身体的症状を前景にもつ精神疾患、穏やかな精神障害者が相当数未届のまま潜在したことが推定されるのだがこれらの患者に対して、県立病院の精神科も、法にもとづく精神病院、または代用指定病院もなく、精神病床は一床もなかった。」²⁾と説明している。また、金城(1963)により、戦前の精神病者数について報告された沖縄県統計年報³⁾からも精神科病床がないことが確認できる。このように、戦前の沖縄には精神科病床が皆無であったことが解る。

それでは、沖縄県において精神科医療は何時か

らどのような形でスタートしたのであろうか。

上与那原(1969)は、「戦後の精神障害者対策の出発はかなり早く、行先よいと思われた。結核患者がコザや宜野座病院の急性伝染病棟に収容されていた頃、宜野座病院に精神病棟が設置された。これは既存の民家の建物をベニヤ板で仕切り、六畳に三人づつ収容し、便器持ち込みの約20床の粗末な病室であった。…中略…。収容施設がいかに粗末であり、一般疾患に較べていかに病床規模が少なくとも、さらに医療施設がいかに貧しくても、戦前の状況に思いを馳せるとき、宜野座の精神科病棟は沖縄精神医療史上画期的な出来事であった。」⁴⁾と述べている。また、国立療養所琉球病院の記念誌(1990)には、「昭和21年4月、沖縄民政府の発足(昭和21年4月24日)に伴い、同施設は米軍から民政府に移管され、精神科(20床)を併設して同政府立宜野座病院(一般科・結核内科・小児科・外科・婦人科・精神科)となった。」⁵⁾となっており、戦後において宜野座病院精神科病棟が開設されている。更に1979年、沖縄県精神衛生協会創立20周年記念誌に元陸軍軍医で精神科医であった清水純

¹ 沖縄県立看護大学

一の手記（1979）⁶⁾が掲載され、現在では沖縄における精神科医療の黎明に関する一般的な理解は、昭和20年6月27日にコザ市（現沖縄市の近く）のアメリカ軍政府G-6-54病院が開設され精神科の治療が行なわれたとなっている。しかし、筆者は沖縄戦に関する既存資料や米国側の報告書等を調べると、清水がいうアメリカ軍政府G-6-54病院以前に精神科医療が行なわれていたことやその場所も異なるのではないかという疑問を抱いた。

従って、今回は沖縄における精神科医療のスタートは、何時、誰によって、どのような形で行われたのか新たな史料が得られたので紹介する。

II 方法

使用した資料とデータは下記のとおりである。

- 1) 米国海軍軍司令室第二次世界大戦に関する史料
- 2) 沖縄戦をテーマにした図書及び証言記録
- 3) 沖縄戦を記録した県史・市町村史・字誌
- 4) その他、戦争に関する新聞等

これら1)～4)の資料については、引用・参考文献として使用したので、ここでの詳細な記述は割愛した。

III 沖縄における精神科医療の黎明

1. 清水純一の手記に対する疑問と考察

先に述べた清水の手記に関し、幾つかの疑問とそれに対する考察を加えたい。清水（1979）は、『昭和20年6月中旬にグアム島を出発、沖縄戦線に向いました。アメリカの軍の輸送船で…中略…数日後沖縄に着きました。…中略…上陸後ただちにトラックに分乗、軍事物資が山と積まれている間を縫って、しばらく走り間もなく、本島の中央部あたりと思われる小さな丘に着きました（中頭郡越來村ーコザ市（現沖縄市）の近く。）

そこに民間人を目的とした旧日本軍医団による病院が開設されたのは6月27日でした。

…中略…巨大なトレーラーに担架に乗せられた。そ

のほとんどが重い外傷患者でした。…中略…この野戦病院の正式な名称はアメリカ軍政府G-6-54病院…中略…私が受け持った精神科の医長はH・HARLAN・CRANKという海軍軍医少佐…中略…メンジヤークリニックから応召された精神分析学派の医師でした。

初めは破傷風患者が多く、既に時期を失いなす術もありませんでした。…中略…

このころ看護婦代わりに現地の娘さんたちが集められ手伝うようになりました。そこへ丁度、ひめゆり部隊生き残り20名が手伝いを志願して来ました。これら娘さんの話を聞くと彼女らは自決した同級生に対し自決しきれなかった自分たちを恥じ深くわびている様子で彼女らは、だれもがいやがる精神病棟の不潔な患者の始末を進んで引き受け、きびきびと働き私たちは感動に胸がつまる思いでした。…中略…

薬物として既にアミタルソーダもあり、持続浴の変法とでもいましょうか、シーツ四、五枚を水で湿めし興奮患者を裸にして首から下にミイラでも作るように巻き付けその上に更に毛布を四、五枚巻いたものです。…中略…

このほか、天ぶらを食べた20数名が発熱、脱毛、末梢神経マヒなどを訴え大騒ぎし、多少にかかわりなく天ぶらを食べた全員があい前後して死亡する事故もありました。原因は調理の際、天ぶらのころもにDDTを小麦粉と間違えて使用したことが、わかりました。

…中略…やや病院が落ち着きを取り戻すと前に書きました吉岡軍医がチーフとなり看護婦教育が始まりました。』⁷⁾と述べている。

1) 清水の手記に対する幾つかの疑問

清水の手記を見る限り、6月末にコザ市で病院が開設され、同場所で外傷の患者や精神科の診療に就いたかのように解釈される。しかし、幾つかの報告からその場所や期日が定かではないのではと推察される。それらに関する以下の5点の資料について紹介したい。

(1) ひめゆり学徒の宮良（2003）の手記を見ると、『…7月の終りごろだったと思います。嘉間良から

南にちょっと行ったところに大きな十字路（のちのコザ十字路）が作られつつあるという噂を聞きました。嘉間良にあった病院も移動しました。嘉間良で学校が始ることになり…中略…私は集合場所へと急ぎました。

ところが、その途中で、捕虜になって安慶田の米軍病院で働いていた八重山出身の当山美子（現・石垣）さん、宮古出身の垣花秀（現・吉村）さん、田場其枝（現・松田）さん、仲真幸子（現・仲本）さんたちに出会いました。私がひとりぼっちで生活していることを知って、私を連れにきてくれたのです。…中略…

私は有頂天になって、とるのも取りあえず鳥が飛び立つようにして安慶田へと向いました。…中略…病院に着くと、病院が国頭のほうへ移動するというごたごた返していました。私もみんなといっしょにトラックに乗せられ、車は一路北へ北へと進みました。…中略…羽地の田井等に着きました。…中略…

真喜屋の病院では、米兵と硫黄島で捕虜になった日本兵と沖縄の人達がいっしょになって働いていました。日本の兵隊たちは木麻黄が3～4本生えた砂浜の金網で仕切られたところで生活し、勤務の時にはカービン銃を持った米兵に前後を守られて出勤し、帰りも同じでした。そのようすは見るも哀れに感じられました。

真喜屋の病院には、負傷した人より、マラリアと栄養失調に犯された人がたくさんいました。

…中略…精神病棟で働くことに決めました。戦前の那覇の商店街では、よく精神異常者を見かけたのですが、ああいっただ精神異常者たちが生きのびて収容されていたのです。また、戦争のショックで気が狂ってしまった人たちもいました。暴れて手のつけられない患者は金網で仕切った独房に入れられていました。「こわいよ、こわいよ。弾が飛んでくる」とさけび、うずくまる患者の姿を見るにつけ、私は戦争を憎まずにはおれませんでした。

硫黄島から生きて帰られた軍医の野口巖先生…中略…軍医だった吉岡英男先生も、「彼女たちは、自決した同級性に対して深く詫びていて、いじらしかった」とかいておられます。

…中略…真喜屋の病院には12月までいました。近いう

ちに病院は名護に移動するとのことでした。…中略…三高女出身の山入端さん、積徳高女の出身の宮城さんたちと別れて、具志川の田場にやってきました。』⁸⁾と記述されている。

(2) 同様に一時宮良と行動を共にした松田其枝(1992)も手記の中で、『7月頃、私たちは米軍の野戦病院で民間人の看護をさせられた。…その頃、日本の軍医や衛生兵がたくさん来て、患者の治療をしたので驚いた。どこからこられたのか伺うと、硫黄島というので…その頃、病院は羽地に移転することに…』⁹⁾と述べている。

(3) 「テンブラ事件」について、田井等誌の名城フミの証言(2008)からみることができる。『1945年8月20～22日の間にテンブラ中毒(後の判明)事件は発生した。…中略…米軍はノミヤシラミ、ハエなどの駆除にDDTを用いていましたので、田井等市の公衆衛生部から各戸に配られていたものが、アンチョウ(重曹)と一緒に置かれていたといえます。DDT入りの「サーターテンブラ」は親類縁者に配り、米兵にもおすそ分けされたそうです。三度継ぎ足して揚げたテンブラを食べた子どもは、すぐに亡くなり、私の弟も死んでしまいました。私の弟以外にも田井等、仲尾次の区民が10人近く亡くなりました。孤児院の事務員も2人亡くなり、私の知る限りでは、米兵も2人死んだと聞かされました。

私は食べて4、5日は、何ともなかったんですが、次第に頭の感覚は麻痺し、気持も悪くなりました。当初、マラリアが発生したものと思いましたが、ついに、真喜屋にあったカマボコ型のコンセット病院に収容されました。…中略…

コンセット病院は満ばいで、一棟は米兵が沢山収容されていました。硫黄島で捕虜になったという日本人医者や米国医者数人が、いろいろ調べるが原因はわからない。治療法もないといえます。』¹⁰⁾と、名城さんは述べている。

(4) 清水は、その時の精神科の医長は、メニンガークリニックのH.Harlan Crankという海軍軍医だったという。H.Harlan Crankは、確かに

Menningerの記録(2005)からみると、第二次大戦で応召され、沖縄で精神疾患やハンセン病そして結核患者の治療にも従事している¹¹⁾。また、米国海軍予備役軍医ジェームズ・クラーク・マロニー少佐(1996)が、田井等にある養老院で、精神異常者である若い女性が少年達に石を投げられているのに遭遇した¹²⁾との記述もみられる。

(5) 保坂(2002)は、「G-6-54病院と清水は呼んでいるが、…中略…マロニー論文によれば、あるいは清水医師の記憶違いかも知れない¹³⁾」としている。

これらの記述からみると、清水等が開設したというG-6-54病院は、アイスバーグ作戦(2001)¹⁴⁾でも、コザ・島袋病院となっており、また、松田其枝も羽地へ移動する以前に米軍の野戦病院で硫黄島帰りの軍医に世話になったと話している。このような事実から当初、清水が中部のコザに着いたことは確かにちがいない。また、その頃の患者について、米国(1986)の報告でも見られるように、4月～6月に治療を受けた住民の殆どが外傷であり、死亡した事例でも外傷によるものが目立ったとなっている¹⁵⁾。清水の手記では、中部から移動したという記述はなく、G-6-54病院における重い外傷患者や精神科、そしてひめゆり部隊の学徒が志願して来たとなっている。

しかし、宮良の手記からも窺えるように、この時期は住民の移動が激しく行われていた。同様に、琉球列島の軍政(2002)でも、『戦闘終了時までに沖縄の基地開発計画はまだ完了していなかったが、それに使用される土地は増加し続け、住民の居住地は島の北部の小規模の不毛地に追いやられた。…中略…1945年4月1日から8月31日の間に、戦闘の変化やその他の軍事的理由から、約25万人の住民を移動させる必要が生じた。彼らの多くはすでに何回も移動させられていた。…中略…着いたキャンプがすでに一杯で、受入れを断られることも数回あった。…中略…トラックの運転手の中には誰にも断らずに難民を捨てて立ち去る者もいた。ひどい例は、夜分にコザの海軍病院の

前に担架に乗せた数百人の病人を降ろして立ち去った例である¹⁶⁾。となっており、住民の移動が如何に激しかったかが分かる。

宮良は、7月の終り頃から12月まで“真喜屋病院”で勤め、その間精神病棟でも勤務している。また、積徳高等女学校の看護隊にいた瀬川(2006)は、宮良より2ヶ月早い「同年6月から同精神科に勤務し、数百人の患者がいた¹⁷⁾と述べている。更に、DDT入りのテンプラ騒動は、北部の田井等での出来事であり、H.Harlan Crankも北部での活動が紹介されている人物である。更に、米国海軍予備役軍医ジェームズ・クラーク・マロニー少佐(1996)が、田井等の養老院で精神異常者の若い女性を見かけたこと、それに保坂も清水の記憶違いではないかという疑問を投げかけている。

以上、これらの資料より清水は、6月27日いわゆる沖縄戦末期から、沖縄本島中部の野戦病院で民間人の医療、特に重症の外傷患者の治療に携わり、その後北部へ移動したのではないかと考えられる。そして、清水が沖縄で精神科医療に携わったのは、沖縄本島中部ではなく本島北部の田井等地区の“真喜屋病院”ではなかったかと推察され、そこで、ひめゆり学徒等との出会いがあったものと考えられる。

なお、真喜屋小学校創立百周年記念誌(1996)によると、「真喜屋区黒崎原米軍病院天幕舎を譲り受け校舎とし、羽地村真喜屋初等学校と称す(1946.4.1)¹⁸⁾が確認できた。更に、比嘉(1985)は名護六百年史において、「S21年2月25日：軍は真喜屋海軍病院を町内の幸地病院跡に移し、名護病院(総合病院)として開院。」¹⁹⁾と述べており、真喜屋に米軍の病院があったことが分かる。

(※ 上記文中の は、筆者による挿入)

2. 沖縄における精神科医療のスタート

先に述べた、清水等が関わった精神科医療は沖

緬戦の末期、田井等区の“真喜屋病院”で行われたのではないかと考察した。それでは、沖縄における精神科医療は、清水の以前には行なわれていなかったのだろうか。今回、ここで新たな資料を加え検討したい。

1) アメリカのアイスバーグ作戦 (2001)²⁰⁾ では、以下のような計画が行われていた。

付録C-医療-第10軍作戦計画1-45 (案) に伴う兵站計画

(筆者による抜粋)

1. 医療品補給

- a. 第10軍司令官が統制を引き継ぐまで
- b. 島司令部を通して第10軍司令官が統制を引き継いだ後

2. 後送

a. 強襲

(1) 後送方針

(a) 負傷した将兵で入院が必要な者は、直ちに艦船や水陸両用車用揚陸艇に設置された病院に後送する。

(b) 民間人は目標地域からの後送の対象にはならない。

b. 急襲後

(1) 後送方針

(a) 地上に適切な病院施設建設してから30日経過後に後送方針が効力を生じる。

c. 空中後送

(1) 太平洋地域総司令官は及び中部太平洋軍前線司令官は、本司令部の要請に基づき負傷者を後方へ空輸する。

(2) 空路：その後の処置をするためにマリアナ諸島へ空輸する。

3. 入院

- a. 戦術的に状況が適切になり次第、地上に常設の病院を建設する。

4. 民間人への医療行為

a. 軍政府病院が地上に設置されるまで、軍隊の医療施設が軍の負傷者の手当に支障のない範囲内で民間人に最小限の医療行為を施す。

b. 軍政府病院は、その施設が地上に建設された時点で民間人負傷者の医療手当の責任を負う。

付属文書13、付録C、添付文書1-医療-第10軍作戦1-45 (案) に伴う兵站計画 (筆者による抜粋)

衛生命令

1. 責任

各部隊の指揮官は、それぞれの部隊内の衛生の責任を負う。この責任は委任してはならない。

2. 概要

a. すべての戦争、何れの戦域、いかなる軍隊であっても、敵の攻撃により病気や非戦闘行為によって戦闘能力が弱体した。

b. 軍隊教練とともに、疾病の予防策がこのような戦闘能力の損失を実質的に減少させていることは、周知の事実である。

c. 部隊内における異常な疾病の発生は、指揮官の不適切な統制能力と重要な指令系統が機能していないことを意味している。

d. 指揮官はこの指令の規程を更に推し進めるために、詳細な衛生指令を発行する。

3. 技術情報と支援

a. 部隊の軍医は、技術情報を提供したり、調査や検査を実施し、指令官に対して提案を提出するように求められる。

b. 全ての梯隊は、マラリア専門医、神経精神病医、衛生工学者、医療コンサルタント、動物食糧検査文遣隊及び医療検査官によるサービスを受けることができる。指令官が適切と判断すれば、このような専門家のサービスを要請することができる。

以下、省略

上述の作戦計画をみると、民間人への医療行為は、軍政府病院が地上に設置されるまでは、軍の負傷者の手当に支障のない範囲内で民間人に最小限の医療を施し、その施設が地上に建設された時

点では民間人負傷者の医療手当の責任を負うとなっている。また全ての梯隊にマラリア専門医や神経精神病医、医療コンサルタントが配置され、必要に応じて活用できるようになっている。

それでは、実際にはどのように活動したのだろうか、その概要をみてみたい。

軍政活動報告（2005）²¹⁾によると、「…医療要員：軍政府の軍医らは4月1日、民間人がアメリカの管轄に入ると同時に活動を開始した。そして、直接民間人の治療に当たった。医療要員が最も多かった1945年4月1日には、軍医98名、歯科医師6名、病院部隊将校18名…中略…。G-10診療部隊は20の移動診療所（ベッド数24）をもっており、各診療班とも軍医1名と約6名の衛生兵が配置されていた。…中略…。

G-6病院：沖縄に最初の軍政府病院（G-6-51）が設立されたのは、4月2日嘉手納海岸に上陸してのち、4月4日コザの民家に落ち着き、翌5日から民間人を受け入れた。その後4月22日までにはベッド数も409床に増えた。6月20日南部戦線突破直後には病院も1,180人の収容患者をかかえてピークに達した。その後間もなく患者の北部への避難が行われ7月10日までには病院の収容患者は51人までに下がった。次の数ヶ月は平均して患者数は150人だった。沖縄戦中期における大量の負傷者を予想して5月18日には宜野座に軍政府病院G-6-59が設置されたが、コザや他の診療所からの回送患者を受入れ、7月10日には1,500人のピークに達した。症例の90%は外傷でわずか10%が栄養失調、回虫によるもの、結核、下痢、その他の疾患だった。9月1日までに病院は1,766件の手術をし、術後死亡は34%の597件に達したが、これは患者が軍政府病院に運ばれる時点において既に状況が深刻になっていたことを物語る。」…以下、省略…。

この活動報告から、アメリカ軍が沖縄本島上陸し、4月4日にはコザの民家に落ち着き、翌5日から民間人の受入れを始め、間もなく北部へも軍政病院を設置し医療を施している。なお、この活動は外傷が90%で、その他栄養失調、回虫、結核、

下痢等の患者となっている。

2) Moses R. Kaufman Report 及びOscar B. Markey Reportの報告にみる精神科医療

ここに、保坂廣志（2005）が紹介した「Moses R. Kaufman Report 及び Oscar B. Markey Reportの抄訳を通して」を紹介したい。

「…二本の報告書は、いずれも精神科オブザーバーとして沖縄戦に参加した精神科医の現地報告書である。同報告書は、Kaufman中佐（当時）が沖縄を出発し南西太平洋司令部に帰還する直前の45年5月1日にまとめられたものである。…中略…二本目は、米第10軍の神経精神病コンサルタントとして沖縄戦に参加したOscar B. Markey 中佐（軍医）の報告書である。中佐は、沖縄戦参加全米軍兵士の神経精神病についての実質的な担当者であり、責任者としての任を担った。報告書は、沖縄戦が終了した直後の45年7月1日に書き上げられ、後にその他の情報を加え、同年10月に公式報告書として完成している。

Kaufman：精神病治療にかかわる当初計画は、第10軍司令官による認証のもと、米太平洋地区軍医部に於いて公式に考案された。それは「移動精神科医チーム」形式と呼ばれるものである。

この目的の達成のため、訓練を受けた4人の精神科医が第24軍師団に配属された。1人の精神科医が、師団に創設される3つの野戦病院のいずれかに出向することになった。そこには、移動精神科医チームとは別に、各1人の精神科医が配属された。米太平洋地域コンサルタントのOscar B. Markey 中佐とが、監督官としての任務と直接担当者としての責務を担った。

レイテ島での医療計画の変更として、確かな理由があれば、可能な限り鎮静剤（sedation）を、野戦病院レベルで使用してもよいという許可が下された。最も効果的な精神病治療は、「戦闘地区内での治療」であることが判明した。あるケースの場合、大隊中隊の救助所（Aid Station）で治療を行う事が効果的でもある。他の場合、師団付の精神科医がいる後送支援に送り込むことが必要になってくる。後送支援では、

2～3日の滞在が許可される。この段階での治療としては、患者の安息、熱いシャワー、着衣の交換、温かい飲食物、鎮静剤による睡眠が付与されることとなる。さらなる治療が必要な患者や後送が必要な者は、野戦病院へ転送される。

沖縄戦では、大量の精神病患者の発生により1945年4月24日に精神的患者だけを収容する第82野戦病院が設置された。そこには、2人の将校が配属され、うち1人は精神科の専門教育を受けた者であった。また、移動精神科医チームから3人の精神科医が派遣された。加えて、精神科医に対する第10軍監督官でありコンサルタントである本官（Kaufman中佐）も、そこで任務を遂行することとなった。さらに高度な訓練を受けた1人のソーシャルワーカーと第10軍軍医部から1人の将校がここに派遣され、各人が専門的な機能を果たすこととなった。

第69野戦病院の部隊は、45年4月2日に沖縄本島に上陸し、小隊幕舎には精神病患者専用の施設が準備された。ここには、4月5日、さらにもう1つの設営小隊が配置され、患者収容の準備がなされた。精神科病棟で必要とされる施設は、ごく簡単なもので、テント、簡易ベット、毛布、それに食堂ぐらいなものである。

第96歩兵師団第321医療大隊の後送支援は、45年4月2日に沖縄本島に上陸、師団付き精神科医は同月3日に上陸し、後送支援の中で精神科患者への治療を開始した。

第7師団の後送支隊は、4月8日からシャワー施設、散髪、レクリエーション施設を完備した。

第31野戦病院は、45年4月2日に当初の計画地で準備を完了し、4月4日に前線へと移動していった。…以下、省略…。

Oscar B. Markey：海兵隊は、大隊レベルでの精神科治療は実現不可能と考えている。海兵隊医療サービスの基本政策は、負傷者は直ちに組織だった師団病院隊に後送することだった。そこでは、精神療法や睡眠剤（Sodium amytal）か催眠剤（Sodium pentothal）を使った催眠治療が行われる。真性の精神病患者を除いて、患者は通常見られる顕著な快復力を示し、やがて日常

の任務に復帰できるものである。」²²⁾と報告している。

KaufmanとMarkeyは精神科医である。沖縄戦では、公式に考案された「移動精神科医チーム」、「戦闘地区内での治療」、大量の精神病患者の発生により、1945年4月28日には精神的患者だけを収容する単独の第82野戦病院が設置されている。その他、沖縄本島上陸後直ちに、例えば31野戦病院では4月4日に前線へと移動している。また、病院では精神療法や睡眠剤、催眠剤を使った治療が行なわれていることが確認できる。

3) 沖縄住民の戦争トラウマ

重ねて、保坂廣志（2002）の「沖縄戦の心の傷（トラウマ）とその回復」によると、「…精神科医のジェームズ・クラーク・マロニー少佐は、宜野座の軍政府施設である米海軍病院（G-6-59）にて神経精神科の患者を調査し、1,500人の収容患者のうち、精神病患者は30人、その内で戦争を原因とする精神病患者は2人であると報告している。また田井等地区の民間人収容所に収容されている48,000人の難民のうち、50人精神病患者が発見できたという。もっとも、宜野座地区には、別に精神科病棟が設けられており、こちらの方には150人が収容されており、30人は精神病患者でなく、120人が正規の精神病患者であると報告している。120人中、53人は、戦争の衝撃により病気が誘発されたという。宜野座地区の精神病患者の内、何人が兵士であり民間人かの区別はされていないが、マロニー少佐の調査では、通常、戦場地で多発するショック反応、いわゆる戦争トラウマの発症は、驚くほど低い」²³⁾と指摘している。

マロニー少佐は、民間人の発病の低い理由として、沖縄の母親の育児について考察している。

米国の精神科治療については、5月のシユガロフの戦闘について、E.B. スレッジ²⁴⁾やジェームス・H・ハラス²⁵⁾の記述にも見られる。

これらの史料からみると、アメリカ軍は4月の沖縄本島上陸と同時に、精神疾患患者の治療も実施していることが分る。そのような医療施設で沖

縄の民間人が治療を受けられたどうかは定かではないが、マロニー少佐の調査結果によると、少なくとも5月18日に開設した宜野座の軍政府病院で米軍により実施されたと考えられる。

4) 日本軍による戦時中の精神疾患患者の医療
日本軍による精神疾患患者の治療はどうなっているのだろうか。元女子学徒の島袋淑子(2006)は、「…5月になると、患者たちの傷の悪化は非常に目立ってきた。すべての患者は身体中が膿と蛆だらけになりになっていた。脳症患者も破傷風患者も次第に増えていった。脳症患者は頭がいかれているので自分で傷の痛みもわからなくなり、重症で寝ている人の上を平気で歩き回って暴れる。「こいつをどこかへ連れて行って」と騒ぐのだ。そうすると看護兵が来て壕の奥へと連れて行く。「どこへ連れて行くんですか」と聞いても返事はなかった²⁶⁾。…と述べている。同様な脳症患者の記述について、女子学徒による記録からも数点見られた^{27)~29)}。しかし、脳症患者が壕の奥、それは壕の平面図の精神病入院室(1995)³⁰⁾あるいは脳症患者収容(2009)³¹⁾でも確認出来たが、奥に連れていかれ、その後どのように対処されたかについての報告は見当たらない(図1、図2)。

また、和田(1976)によると、野戦病院の機能として、組織上は“精神病室”³²⁾の記述が見られる(図3)。但し、これらはいずれも野戦病院のことであり、そこで治療を受けられるのは軍人であり一般住民ではない。

このように、軍人である脳症患者が壕内でも見受けられ、野戦病院の中でも“精神病入院室”“脳症患者収容”“精神病室”として部屋はあるが、壕の奥へ連れていかれた患者がどのような処遇を受けたのか、現在のところ不明である。従って、戦時中日本軍による精神科の処遇は、収容はしたのかも知れないが医療は行なっていなかったのではないかと推察される。

従って、沖縄における精神科医療は、沖縄戦当時、少なくとも5月頃から米軍の野戦病院において米国人によりスタートされたと言えよう。

3. 米国側の記録の収集と課題

今回、新しいデータが入手できたのは、米国の膨大な公文書や研究報告書を沖縄県や保坂が収集し、翻訳され史料として活用できた。しかし、医療に関する史料は、県内には僅かしかなく、今後も国内はもちろん米国側のデータの収集に努力する必要がある。

まとめ

1. 沖縄戦の末期、硫黄島帰りの精神科医である清水純一は、沖縄本島中部のアメリカ軍政府G-6-54病院が開設され精神科医療が行なわれたという記述になっている。現在において、それが沖縄における精神科医療のスタートという一般的な理解となっているが、その場所や期日について、幾つかの疑問が確認された。
2. 沖縄における精神科医療のスタートは、沖縄本島上陸後の4月4日には、第31野戦病院が前戦へと移動していた。また、民間人に対する精神科医療は、少なくとも1945年5月中旬から米軍の軍政府病院で米軍により実施されたと考えられる。

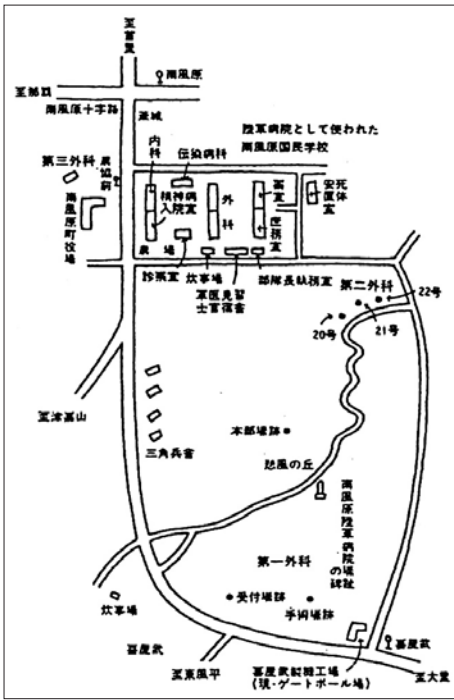


図1 陸軍病院壕内部の様子

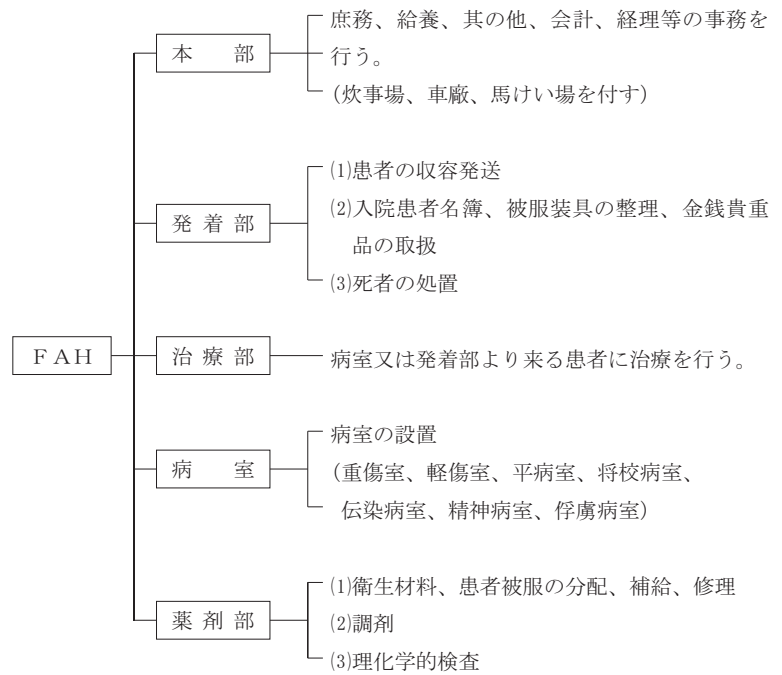


図3 野戦病院の機能(基準)

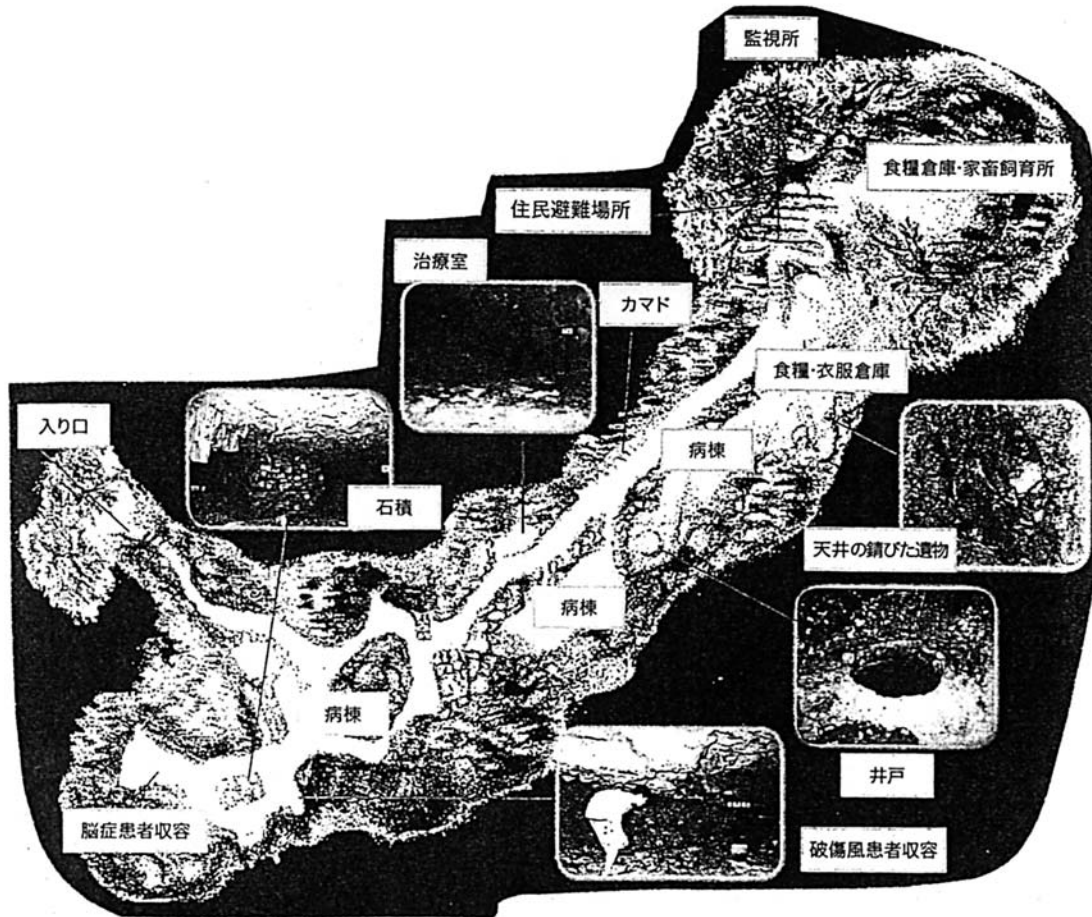


図2 糸数アブチラガマの内部

【引用・参考文献】

1. 立津政順著 (1979)：沖縄の精神科の戦前と戦後「吉川編著、沖縄県精神衛生協会創立20周年記念 沖縄における精神衛生の歩み」所収、p262, 沖縄県精神衛生協会
2. 上与那原朝常他著 (1969)：沖縄における精神衛生事業の歩み、「精神衛生2号」所収、p21, 沖縄県精神衛生協会
3. 金城清松・長田紀秀 (1963)：沖縄県衛生統計年報1922～1946, 球陽堂書房
4. 上与那原朝常他著 (1969)：前掲書 p 21
5. 国立療養所琉球病院 (1990)：創立40周年記念誌, p15
6. 清水純一 (1979)：硫黄島, 沖縄に生きるーアメリカ軍政府G-6-54病院に働いて、「吉川編著、沖縄県精神衛生協会創立20周年記念 沖縄における精神衛生の歩み」所収、p251-261, 沖縄県精神衛生協会
7. 清水：前掲書, p 251-259
8. 宮良ルリ (2003)：私のひめゆり戦記, p171-180, ニライ社
9. 松田其枝 (1992)：沖縄戦と私, 「長田紀春・具志八重編：閃光の中でー沖縄陸軍病院の証言」所収, p187-188, ニライ社
10. 名城フミ (2008)：テンプラ事件, 「字誌編集委員会編：田井等誌」所収, p130-131, 名護市字田井等
11. Menninger Alumni Association (2005)：Newsletter, Vol52-2 p8 August
12. 沖縄県史 (1996)：沖縄県史 史料編2 琉球列島の沖縄人・他 (和訳編), p190, 沖縄県立図書館史料編集室編集, 沖縄県教育委員会
13. 保坂廣志 (2002)：沖縄戦の心の傷 (トラウマ) とその回復, 琉球大学法文学部人間科学紀要「人間科学」9号, p78-79, 琉球大学法文学部
14. 10TH ARMY OPERATION ICEBERG (2001)：沖縄県史史料編12ーアイスバーグ作戦 (和訳), p 351, 財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室編, p291-292, 沖縄県教育委員会
15. 上原正稔訳編：沖縄戦アメリカ軍戦時記録ー第10軍G2②レポートより, p386-397, 三一書房
16. 沖縄県史 史料編14 (2002)：沖縄県史史料編14 琉球列島の軍政1945-1950, 財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室編集, p51, 沖縄県教育委員発行
17. 瀬川晴子：シリーズ戦後60年ー精神障害と沖縄戦5, 沖縄タイムス2005年5月26日 (朝)
18. 真喜屋小学校創立百周年記念誌 (1996)：名護市立真喜屋小学校創立百周年記念事業期生会記念誌部編：p58, p226-236, p321, p326-328, 名護市立真喜屋小学校創立百周年記念事業期生会
19. 比嘉宇太郎 (1985)：名護六百年史, p281, あき書房
20. 10TH ARMY OPERATION ICEBERG (2001)：前掲書, p291-293
21. 沖縄県史 (2005)：沖縄県史 史料編20 軍政活動報告 (和訳編), p8-9, 財団法人沖縄県文化振興会 公文書管理部史料編集室編, 沖縄県教育委員会発行
22. 保坂廣志 (2005)：研究ノート 沖縄戦参戦米兵と戦争神経症, 琉球大学法文学部人間科学紀要「人間科学」15号, p44-46, 琉球大学法文学部
23. 保坂廣志 (2002)：沖縄戦の心の傷 (トラウマ) とその回復, 琉球大学法文学部人間科学紀要「人間科学」9号, p44, 琉球大学法文学部
24. E.B. スレッジ (1991)：泥と炎の沖縄戦, 外間正四郎訳, 琉球新報社
25. ジェームス・H・ハラス (2007)：沖縄シュガーロフの戦い, 猿渡青児訳, 光人社
26. 島袋淑子 (2006)：「沖縄戦の全女子学徒隊」所収, 青春を語る会編, p 93-94, フォレスト

27. 渡久山ハル（2006）：「沖縄戦の全女子学徒隊」所収，p89-90，前掲書
28. 仲里マサエ（2006）：「沖縄戦の全女子学徒隊」所収，p91-92，前掲書
29. 武村豊（2006）：「沖縄戦の全女子学徒隊」所収，p124-125，前掲書
30. 大田昌秀監修（1995）：写真集 沖縄戦 第六版，P55，那覇出版社編，那覇出版発行
31. 沖縄平和祈念資料館編（2009）：沖縄の戦争遺跡，p39，沖縄時事出版発行
32. 和田友教他（1976）：第32軍の衛生活動，航空自衛隊那覇基地衛生隊